シリーズ 城

特許審査第3部プラスチック工学　深草 祐一

第四回　肥前名護屋城
～豊臣秀吉の朝鮮出兵・数年で消えた大城郭～

今回は肥前名護屋城をご紹介します。金のシャチホコで有名な尾張名古屋城ではなく、文禄・慶長の役（韓国では壬申倭乱・丁酉再乱）と呼ばれる朝鮮半島侵攻作戦の本営として豊臣秀吉が九州に築かせた城です。この城は秀吉の死去によって役が終結するとすぐに解体されてしまったため、存在したのはほんの数年間だけでした。しかし、一時期は日本有数の人口密集地だったのです。

名護屋城の築城

唐津の北西に突き出た東松浦半島の先、はるか朝鮮半島を望む玄界灘に面した高台に名護屋城は築かれました。この地は、もともと肥前松浦党に属する名護屋氏の古城跡でしたが、ほんの小さなものに過ぎませんでした。そこに天下人秀吉が着陣する基地として大規模な城が築かれることになりました。

5層7重の黄金の天守がそびえる本丸を中心に、二の丸、三の丸のほか、弾正丸、山里丸といった郭を幾重にも有し、遠征基地に過ぎないものでありながら、当時の大阪城内郭に匹敵する巨城でした。その巨大城郭を、熊本城で知られる加藤清正、そして後にこの地の領主となって唐津城を築いた寺沢広高が普請奉行となり、九州の諸大名を動員してわずか5ヶ月で完成させたといいます。太閤豊臣秀吉の権力の絶大さが偲ばれます。

更に城の周辺には、徳川家康、前田利家をはじめ、全国の大名が陣屋を構えました。半径3km程度の範囲内に120を超える陣屋が立ち並び、朝鮮半島に渡った軍勢とは別に彼ら諸大名が率いる十数万人の兵が駐屯していました。更にそれを目当てに集まった商人の店が軒を連ね、当時の人口は20万とも30万とも言われています。当時の大都会である堺や博多のような活況を呈していたのです。

文禄・慶長の役の経緯

ようやく日本全国を平定したにも関わらず、その翌年の夏、豊臣秀吉は休む間もなく「唐入り」を宣言します。明の征服については織田信長が既に構想を描いていたといわれていますが、秀吉は無謀にもそれを本当に実行に移したのでした。まずは李氏朝鮮に明侵攻の道案内をせよとの使者を送りますが、明と親密な朝鮮は当然にこれを拒否。秀吉は重臣の多くが反対だったにも関わらず、朝鮮・明侵攻のための大動員令を下しました。

早速その秋に名護屋城の築城が開始され、翌年の春

文禄の役地図

には小西行長らの第1軍が釜山へ上陸しました。9軍に編成された遠征軍はおよそ16万。戦国の世を戦い抜いてきた日本の軍勢は、鉄砲を中心とした戦術で、朝鮮軍を圧倒します。わずか18日後には首都漢城（ソウル）を占領、1月後には平壌に入城しました。ただし、このような破竹の進撃ができたのは、朝鮮王朝の腐敗に不満を持つ朝鮮の人々がこの機に乗じて反乱を起し、日本の軍勢に協力したためでもあったようです。

しかし、その後状況は変わってきます。各地で農民や僧侶などが義兵として立ち上がり、ゲリラ戦を始めたのです。ベトナム戦争の例でも分かるようにゲリラは民間人と区別がつかないため、戦いは泥沼化していきます。また、南海岸では朝鮮水軍の李舜臣が有名な亀甲船によって時代遅れの日本水軍をことごとく打ち破り、食糧の補給路を断ちました。更に、季節は冬に移り、極寒の気候と飢えのために日本の軍勢の士気は低下していきました。そこに明からの援軍が到着。小西行長らは平壌からの撤退を決定します。明軍はそれを追って漢城へ迫りますが、体勢を整えて迎撃に出た日本の軍勢の前に散々に打ち破られました。しかしこの後、戦線は膠着状態に入り、補給困難が続く日本の軍勢は次第に南へ退いていきました。

この間、明との和平交渉が進められていましたが、加藤清正が秀吉の意に従って明を屈服させる方針で交渉に臨んだのに対し、国際情勢の現実を見ていた小西行長や石田三成は秀吉をごまかしてでも早期終戦に持ち込もうとしました。三成は、交渉の邪魔となる清正の行動を制するため、清正が交渉のために勝手に豊臣姓を名乗ったことを秀吉に報告し、結果、清正は帰国・謹慎させられました。こういったことが、後の関ヶ原の戦へ続く豊臣家臣団内部の対立の火種となっていったのでした。

さて、和平の条件として秀吉は朝鮮の南半分の領有や明の皇女を后妃に迎えるなどの条件を出しますが、こんな条件はとても受け入れられないことが分かっていた小西行長は明の沈惟敬と謀り、明の常識に沿った「豊臣秀吉を日本国王と認めること」という朝貢の申し出にすり替えて明へ届けます。そして、それに対応した明からの上から見下ろす返答を聞いた秀吉は激怒し、即日再出兵を命じました。

再び編成された約15万の軍勢は、かねてから築城していた日本式の城（倭城）に拠って南部地域を確実に抑える作戦に出ました。また、李舜臣が讒言にあって失脚していたため、日本水軍は海戦で大勝利を収めて制海権を得ました。しかし、本腰を入れて派遣されてきた明の大軍、そして義兵のゲリラ戦のため、各地で苦しい戦いを強いられました。更に、復帰した李舜臣によって水軍が大敗すると、再び食糧難に陥ることとなりました。

そうした中、秀吉が死去。日本の軍勢は朝鮮からの撤兵を開始します。撤退戦は熾烈を極めましたが、そんな中で島津義弘が泗川で圧倒的多数の明軍に包囲されながら逆にこれを粉砕するなど、鬼石曼子と呼ばれて恐れられました。そして最後には、順天で陸海から包囲された小西軍を救出に向かった島津軍の船団に、日本の軍勢逃がすまじとする李舜臣が攻撃をかけ、日本の軍船ほとんどを沈めながらも、李舜臣が討ち死にするという凄まじい攻防が行われたのでした。

現在の名護屋城址

石垣は一部崩れていますが全体によく残っており、廃墟ながら城郭の大きさに驚かされます。また、城址公園内には歴史博物館があり、肥前名護屋城図屏風を元に再現された当時のジオラマや、亀甲船の模型などを見ることができます。

名護屋城の近くにはイカで有名な呼子があり、天守台跡から巨大な呼子大橋が見えますが、付近に大きな町はありません。本当にここに20万人もの人々がひしめいていたのかと疑いたくなるほど自然豊かな景色が広がっています。それだけに、一瞬だけ歴史の表舞台に登場して消えていった巨大な城跡は、複雑な感慨を感じさせる場所と言えるでしょう。

名護屋城天守台より